

インタビュー〈前編〉

ネッロ・サンティ

オペラでは、指揮者は上演される言語を扱うことができなければなりません。
この理由から私は英語のオペラを振らないのです。

取材・文=中 東生
Text=Sbinobu Naka
写真=堀田力丸
Photo=Rikimaru Hotta



今世紀の幕開けと共にNHK交響楽団(以下、N響)に客演し始めたサンティが、今年も4種のプログラムとともに来日、コンサートの間を縫ってインタビューにに応じてくれた。オペラ界の重鎮とも言うべきサンティ。その豊かな経験とキャリアからあふれ出る言葉は、深く、重い。インタビューの様子を2カ月連続でご紹介する。

あるのは、良いオーケストラと悪いオーケストラだけです。

長時間のフライトと時差で、訪日を億劫に思うウエテラン・アーティストも多い中で、毎年のようにN響客演を実現させる原動力とは何ですか。

サンティ(以下、S) 職業への情熱、望まれる場所で良い音楽を聴いてもらう

という職業的義務感です。

N響のようなシンフォニーオーケストラと、オペラハウス専属のオーケストラと間に何か違いはありますか。

S 違いはまったくありません。あるのは、良いオーケストラと悪いオーケストラだけです。N響は世界で最も良いオーケストラの一つで、共演することは私にとつて、毎回大きな喜びです。どんな曲でも弾きこなし、また、曲によって見事にスタイ

ルを変えることができ、技術的にも、練習に臨む準備態勢も素晴らしい。そして最近採用された若手たちもとても優秀です。今回の《ボエーム》も、演奏した経験が皆無であるにもかかわらず、私の要求に正確に答えてくれました。

それで、大成功だったのですね。その他の勝因は何とお考えですか。

S まず、プッチーニの作曲したこのオペラが最高峰の作品だからです。そして、



Interview

Nello SANTI

今回の歌手陣は、このオペラを演奏会形式で上演するには最適のメンバーでした。また、聴衆がよく知っているオペラを選ぶことも、この形態でのコンサートには重要です。《ボエーム》は初演後11年目です。オーケストラに良いオケと悪いオケの2種類しか存在しないのと同様に、作品にも良い作品と悪い作品しかないのです。長い年月愛されてきた作品はやはり、良いものが多く、悪い作品がたくさん存在する現代音楽界では、それらが時と共に淘汰されていくでしょう。

——今回はブッチーニの《ボエーム》にチャイコフスキー、ベートーヴェンとイタリア、ロシア、ドイツという3カ国の異なる色が要求されますね。2005年にパシフィック・ミュージック・フェスティバルで来日された際のインタビュー

で『オーケストラか指揮者のどちらかが作曲家と同郷でなければならぬ』とおっしゃっていましたか。

S それは特にオペラについてです。オペラでは、指揮者は必ず上演される言語を扱うことができなければなりません。この理由から私は英語のオペラは振りません。《ローエングリン》を振った時は、歌手はすべてドイツ人でしたし、当時はイタリア語の対訳が、すべて頭に入っていました。《バラの騎士》は今まで振ったことがありません。あのオペラはウィーン訛りだからです。同じ理由で、ヴェネト州出身の私は、ヴェネツィア方言のヴォルフフェラーリは振ることが出来るのです。英語のオペラも私には無理です。同様に歌手も歌う言語を操れなければならぬのは当然です。シンフォニーに関しては、私はもともとモーツァルト

ベートーヴェン、シユトラウス、ワーグナー等と大変相性がよいように思っています。

その国の風習に従って生活することが、その国の音楽を理解するために不可欠です。

——日本人音楽家と多く接してみて、音楽家として、日本人であることの長短所はどんなところでしょうか。

S 長所は、経済大国の恩恵を受けて、本場に留学できる可能性が大きいことでしょうか。歌手に必須の言語だけではない、楽器奏者でも、自分が専門とする音楽が生まれた国に行つてその空気を吸うことは、絶対的に必要なことなのです。そして、その国の風習に従って生活することが、その国の音楽を理解するために欠かせないのです。それから、日本人の勤勉さも長所です。どんなにお金があっても、才能があっても、勉強しなければ大成することは不可能ですから。短所は、長所と表裏一体で、経済的に可能なために、才能がない人でも、留学できてしまうことでしょうか。

——N響との共演は6回目になりますが、アイディアはほぼ実現しましたか？ それともまだまださんのプログラム構想がありますか。

S 今までにやりたかったことはできましたが、今後もまだまだ続くかと思っています。アイディアは、共演時期によって変わりますので、今申し上げることはできませんが、毎回、本当に幸せだと思つて共演しています。そしてつねに誰に対しても正直に仕事をしたいと思つています。

——去る9月にはマエストロの本拠地であるチューリヒ歌劇場が初来日公演を果たし、サンティの名前を探した音楽ファンも多かったと思いますか。

S 正式なオファーを受けたわけではありませんが、頼まれても絶対にOKは出しません。私の初来日は1989年ヴェローナ野外劇場の来日公演で、その後ローマ歌劇場とも来日しましたが、N響のような一流のオーケストラに客演する立場になった今では、他のいかなる歌劇場とも来日するべきではないと考えるからです。

——それではサンティのオペラを日本で鑑賞できるかどうかは、N響にかかっているわけですね。以前のN響にはイタリア・オペラの黄金時代があり、大歌手をライヴで聴く幸運をもたらしていたのですが……。

S あの時代にはブライヴエートで活躍するイタリア人興行主、シヨイエットがいたからです。今の時代では難しいでしょう。また、当時のような歌手の顔ぶれを集めるのも不可能です。でも、新国立劇場でN響がオペラをやるようなことがあれば、もちろん振りたいものです。

(次号に続く)

ネッロ・サンティ★指揮 Nello SANTI

1931年、アドリア生まれ。幼少の頃より、ピアノ、ヴァイオリンほか、さまざまな楽器を学び、バドヴァのポリニ音楽院で作曲の学位も修める。1951年にバドヴァのヴェルディ劇場(リゴレット)で指揮者デビュー。1958年から40年近くもチューリヒ歌劇場の音楽監督を務めながら、ウィーン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、メトロポリタン歌劇場ほか、世界のメジャー歌劇場に客演。初来日は1989年ヴェローナ野外劇場。2005年にはPMFの首席指揮者も務めた。N響には度々客演。2007年11月に行われた定期公演で6回目の共演を果たした。